

令和6年度第1回高知県地域学校協働活動推進委員会 会議要旨（各委員まとめ）

1. 日時 令和6年11月14日（木）10:00～12:00
2. 場所 高知県立塩見記念青少年プラザ 5F 多目的室
3. 出席者 委員7名、事務局4名 ほか14名
4. 議事
 - （1）令和5年度実績報告及び令和6年度中間報告
 - （2）協議テーマ
「子どもの「確かな学力、健やかな体、豊かな心」の育成に向けたコミュニティ・スクールのあり方について～導入後の取組について～」

5. 議事概要

委員長の議事進行により、以下の事項について、事務局から説明が行われた。委員からの主な意見のまとめは以下のとおり。

（1）令和5年度実績報告及び令和6年度中間報告についての説明

【委員】

随分取組みが進んできた。小中学校課から説明があった7月31日の研修において、合同で行ったことも1つの成果とあったが、後半は研修を聞くだけだったので、合同で行ったことの意義については、振り返りの12ページに書かれてあるように、来年の合同研修は教員と地域保護者が、一緒にグループで演習等を行う内容を考えることが大事だと感じた。

今、大事なものは、学校運営協議会も立ち上がり、設置率はほぼ100%で形は整ったが、従来から言われているように、本当に生きて働く組織になっているのか、制度を活用して、本当に進んでいるのかとなるとスタートの段階からは、形骸化しているように見える。

学校運営協議会は年に2回の開催で、会のほとんどを校長先生が説明し質問も意見もないまま、最初にスタートして、年度終わりに報告を行うというのでは運営協議会の制度を活用した取り組みにはなっていない。今こそ本質に向かって、研修を仕組んでいく時だと思う。本質について、例えば運営協議会であれば、保護者や地域の方々に参画をしていただくというのが制度の強みであるので、参画をしていただくためには、なぜ必要かというところから入り、そのために、どんな手立てができるか、関係者が集まり熟議をする。情報交換の時代から、熟議を重んずる研修に移行すべき時代が来ていると私は考えている。

地域学校協働本部事業についても、何をするかとなると、情報交換も大事であるが、本当に地域との連携協働が必要なのかどうか、地域学校協働活動を推進し、目指すものは何なのか、色々な立場の方が、熟慮と議論を重ね、理解を進めることで、形骸化しないと思うので、色々な事を順番に行うよりは、1つのテーマでみんなが熟議をすることで、考えが深まり、意欲に繋がると感じた。

【生涯学習課】

来年度について、委員のご意見のとおり、学校と地域とを一緒に行ってはどうかといったご意見はアンケートでいただいているので、工夫をしていきたいと思っている。また、先ほどの情報交換のあり方としての熟議を取り入れるということについても、来年度の研修内容を検討していきたい。

【小中学校課】

担当としては、生涯学習課と同じように考えている。また、教職員の参加に関しても、さらに呼びか

けていただきたい。

【委員】

先ほどの委員の内容と重複するところがあると思うが、小中学校課と生涯学習課が合同で研修を行えたということは、大きな一歩だと感じた。

第1回目だったので、いろいろと課題が出てきて、それについてたくさんの意見が出てくる。これこそ、すごいことだと感じた。来年度以降も、生涯学習課と小中学校課の合同での研修を、継続的にしていただけたら、これからも実りのある研修会になると思うので、継続をお願いしたいと思う。

【委員長】

資料2について、放課後子ども教室が2ヶ所減ったとあったが、原因もしくは理由が分かれば教えていただきたい。

【生涯学習課】

放課後子ども教室の減少に関しては、学校の統廃合により、該当の学校区にあった放課後子ども教室が減少しているものである。

【委員長】

推進委員会で協議すべき事項として、研修の企画に関することが位置づけられている。研修に関して、今後取り上げた方がよいテーマや提言等あればお伺いしたい。

【委員】

昨年度、コーディネーター研修会に参加した際、グループ協議の中で役職に幅があり、一斉に色々な人が集まって議論するとなると、お互いが求めている情報は、バラバラなのではないかなと感じた。今年度、コーディネーター研修会での協議の際、役職ごとにグループ分けするなどの取組があったのかお伺いしたい。

【生涯学習課】

今年度のコーディネーター研修会でのグループワークについては、グループを2つ作った。1つ目のグループワークでは、経験年数が3年以下と4年以上で20分程度グループワークを行い、その後は地域が近い方同士でグループ分けを行い、2つのパターンを、1日の研修で行った。

【委員】

もし可能であれば、他のコーディネーターからどれほどのリクエストがあるのかは分からないが、最近総合的な学習の時間をメインで担当される方も増えてきていると思うので、同じような活動をしている方同士をグループにいただけると、かなり専門性も高められると思うので、より学校、地域が連携した取組に繋がっていくと感じている。

【委員長】

私も、いの町で行われた第1回のコーディネーター研修会に参加したが、グループを組み換えて、2

回グループワークを行ったので、非常に斬新で、楽しく研修に参加することができた。今年度は経験年数と地域ごとということだったが、委員が言われたように、実際の業務内容、担当されてる仕事の内容に応じたグループ分けも一つの案ではあるかと思う。

【委員】

3つあり、1点目は、このコーディネータ研修会に私も参加させていただき、一番最後に、明日から意識したいことを書いて、参加者で集合写真を撮ったが、研修を通じて、これから何につなげていくかというアウトプットを行っての終わり方はすごく良いと思った。研修会で何かいい話を聞いて終わったという流れから、1歩進めるような形であったのと、2つのグループ協議の構成は良いと感じた。学校運営協議会と地域学校協働本部のそれぞれの強みを生かし、一体的な取組をすることが、全体としては大事になってくるが、地域学校協働活動に関わってる方にも、運営協議会のことを知っていただき、学校運営協議会の方にも地域学校協働活動について知っていただく。進めていく真ん中には、教育目標や目指す子ども像があるという流れで考えると、仕組んでいく上で、私が大事だと思うのは熟議である。熟議がなぜ大事なのか、どのようなテーマで、どのように熟議を進めたら良いのかが学べるような研修が1つあれば良いと思う。もう1つは、教育目標や目指す子ども像をみんなで作り上げることが大事ということの気付きや学びがある研修、3点目は、地域との連携協働において、なぜ学校と地域が連携協働することが大事で、推進することにより、どこを目指すのかということについて、みんなが知恵を出し合い、検証をし、次に繋がれば良い。研修会は限られた時間なので、どの研修に何を落とし込むかということも大事になるが、3つを行うことにより、生きて働く組織への第一歩があるのではないかと感じている。

【委員長】

熟議は急に行おうとしても難しく、更に熟議を仕掛ける立場になると余計にハードルが高くなるので、熟議に参加する地域住民や保護者、そしてコーディネーター向けのものや熟議を仕掛ける教職員や管理職向けの研修などもこれから充実させていく必要があると思う。

(2)「子どもの「確かな学力、健やかな体、豊かな心」の育成に向けたコミュニティ・スクールのあり方について～導入後の取組について～」

【委員長】

本日の協議の一番の中心的な課題は、背景趣旨の、アンダーラインの部分で、どうすれば、教職員に地域学校協働本部事業の効果、地域と連携することの効果、有効性を理解していただくことができるかである。教職員の理解促進のためにはどういうことが考えられるか知恵をいただきたい。地域学校協働本部事業、地域学校協働活動については学校の教職員にとって効果や有効性があると言われており、期待される効果としては、教職員1人では難しい、子どもの学びを深めることや、地域と連携することにより、子どもが抱えている様々な課題の解決に繋がったり、働き方改革にも繋がる。いの町の事例では教職員の時間的・心理的な負担軽減になっている。

他にも本県の事例で、四万十町のある学校では職員会で熟議を行うことにより、地域学校協働活動に関する理解を深めるような取組を行っている所もある。教職員に対して様々な理解の進め方が考えられる。

また、本日何度も話題に出ているが、学校地域連携推進担当指導主事がこれまで教育事務所、高知市で配置されていたが、体制の関係で教育事務所への配置が終わった。これまで、学校地域連携推進担当指導主事が学校訪問を行い、かなり丁寧に、地域学校協働本部事業や活動に関する効果・有効性について説明していたが、県の体制として今年度より終了した。

これらのことを踏まえ、委員の皆様から、自由な発想で実現の可否は特に問わないので、ご発言いただき様々なアイディアを出していただきたい。

【委員】

色々な視点で課題に迫っていく方法がある。学校側サイドまたは地域側サイドで話をする方法がある。私は学校関係者であるので、学校側からの意見を述べると、まずは校長先生のビジョン、更にはリーダーシップが地域連携に関しては大きいと思う。地域連携を非常に大事にし、重要視している校長先生については当然学校経営の中の柱になってきて、教職員への周知が進んでいくが、残念ながら地域連携を重視されてない校長先生であれば、教職員も意識しない。

まず一つは、現行の学習指導要領がきちんと、管理職、特に校長先生に理解されていることであり、開かれた教育課程をどう実現していくかである。学校の教育内容と社会が繋がらなければ、今までの学習指導要領は学校で習った知識・技能が社会に出てもあまり役に立たないといった課題が言われていたし、同調圧力があって子どもたちが生き生きと意見が述べることができているという学校側の課題があった。少子化になり、ますます子どもが少なくなっていく中で、学校で習ったことが社会に繋がっていくための1つのキーワードとして、社会に開かれた教育課程で実現してくださいと学習指導要領に記載がある。学校長がきちんと理解しながら社会に繋がるためにはまず身近な地域と子どもを当然繋げていかなければいけないし、身近な子どもと繋げていくためには、自分の母校にあるコミュニティスクール（学校運営協議会）、地域学校協働本部を活用しない手はない。そこに視点を向けるためには、校長の意識改革、意識を高めるための研修をどうするか、さらには、市町村教育委員会への働きかけをどうしていくかということも、県として必要ではないかと思う。

【委員長】

校長先生の研修に関わる、ご意見、ご提案があったが、現状はどうなっているか。

【生涯学習課】

それぞれの地域の校長会があるので、地域と学校の連携協働としてまとまった時間があるわけではないが、年度当初の校長会などで県の教育委員会の各課の取組について、限られた時間の中で説明はさせていただいている。

【生涯学習課長】

委員の方からご意見をいただいたように市町村教育委員会に対し、どのように伝えていくかということになってくるかと思う。ご意見を聞きながら、現在、各教育長の前で説明している資料を思い浮かべた際に、学習指導要領の部分まで踏み込んだ資料、説明になっていないと思う。早ければ今年度中にも場面があるかと思うので、各教育長に学習指導要領の内容も含めて、理解いただけるような資料を作り、説明を行っていただければと感じた。

【委員】

委員から話があったように、校長先生のビジョンや意識が大事という部分は私も同じように思う。黒潮町で放課後子ども教室に関わっている中で、放課後子ども教室や放課後児童クラブが多く各市町村で実施されており、放課後の子どもたちの居場所づくりとして大きな役割を担っている。放課後子ども教室の学校の中での位置付けについて、以前の推進委員会でも話をさせていただいたと思うが、学校によっては放課後子ども教室は別物といった意識があるのではないかと感じており、同じ子どもたちを見ているという部分では、地域学校協働活動で放課後子ども教室を位置づけていかなければと思っている。学校と放課後子ども教室の連携が、大月町の事例を見ると学校としてもプラスであり、放課後子ども教室としても学校と繋がる活動ができているということも実感できる。

学校が、放課後子ども教室を良い意味でどう生かすのかという部分を考えられることが必要ではないかと思うし、そのためには、校長先生が、放課後子ども教室を学校教育活動の中にどう位置付けていくかという意識が大事ではないかと思う。放課後子ども教室をどう活かしていけるのか、児童館も行ってあるので児童館ともどのように連携していくのかも含めて、学校側の認識を確認をしていく必要があるのではないかと考えている。上手く連携している学校もあると思うので好事例を積極的に出していき、このような連携をしていくと上手くいくという事を伝えていければ良いのではないかと感じた。

【委員長】

学校と放課後子ども教室や児童館が連携していければ良いのではないかとと思うが、具体的にどのような連携の理想、ビジョンを持っているか。

【委員】

児童館を1館委託を受けてるが、学校も授業の中で、地域の話をしてもらいたいとか、子どもたちの遊びに関して連携してもらいたいということがあり、出来ることをアピールしている。地域の町探検で児童館に来てもらう等の連携はあるので、学校の中で先生がどこかに行かなければならず、人手が足りない時に、児童館に助けてもらえないかといったことであれば、自分たちは行きますんでといった連携はしている。同じ子どもたちを皆で見ているといった雰囲気を作れたらと思っている。

【委員長】

ある学校の教員から、家に帰って親がいないと子どもは宿題に手がつかないようで、大人が教えるのではなく見守るだけでいいので、見てくれるとありがたいと、聞いたことがあった。

【委員】

宿題の見守りに関して放課後子ども教室でもやられているとは思うので、学校として、放課後子ども教室をどう位置付けていくのか。連携がとれていないと、放課後子ども教室の支援員さんたちは、気になること、疑問に思うことについての連携が難しい。学校側の意識が、放課後子ども教室側からは見えないのでどのようになっているのかと思う。

【委員】

今度、放課後児童クラブ等の支援員の方へ発達障害の研修を行うが、気になる子どもがいた際に、学校の教員に訪ねてみてはどうですかという話題を投げかけようと思っていた。特に宿題に関しては子ど

もが持っている特性上できないが、出されていた宿題を親はその場で行って欲しいと言われる。支援員の方たちも、取り組むことが難しいのでどうすればいいのだろうかといった戸惑いがあるが、学力のことに関しては学校の教員に聞くしかない。そういった内容を入れようと思っていた。話も聞きながらイメージをした時に、私は福祉の現場にいますので、学校の方を訪問させていただき事業も行っているのですが、学校の中に福祉の立場の者が入ってくるときの雰囲気の違いは感じている。他職種連携が言われている中で、誰が上にいるという話ではなく、平場でみんなが、意見が出し合えるような連携のあり方についても広がっていくためには必要な視点である。学校には若い先生がたくさんいるが、社会経験はなく教師経験も浅いので連携に関しては非常に難しい。つなぎ役は一体誰がしてくれるのかということが疑問に感じている。

私の体験では、昨年本川の中学校と関わっていたが神楽があると地域にもメリットがあるので、連携に関しては難しくなく効果も浸透していくが、私が住んでいる高知市で考えた際に、地域と連携した際の効果について教員が体験し理解しないと繋がっていかないのではないかと感じた。

【委員長】

現場に行くと若い先生が、人数としては少ないかもしれないがいますので、大学が養成の段階で、大学生のうちに、もっといろんな地域との関わりを持たせ、地域の経験を持って、採用されるよう、教員養成の段階で、地域との接点を持った方が良いのではないかと思います。また、教員が地域との接点を持って、実際に体験をしないと理解できないという指摘に関しては、その通りだと思います。以前、総合的な学習の時間を通じて、地域に子どもたちを連れていくことにより、教員の方が、地域のことを学び、効果を実感していると聞いたことがあった。教員がもっと地域と接点を持つことを意識的に作っていくことが大事だと思う。

【委員】

学校が取り組んでいることと、地域が取り組んでいることが共有されていない場合は進まない。なぜ共有するかということと子どもの成長や、子どもの地域での幸せを中心に、目標やビジョンを共有して進めることが大事になってくる。その真ん中にあるのが、最初に私が申し上げた、それぞれの地域に目指す子ども像があれば、子どもの現状を学校や保護者、地域の方が、今の子どもの現状を共有し、子どもをどう育てるかといったものをみんなでつくり上げることにより、地域の子どもたちを学校、保護者、地域が力を合わせて育てようとする当事者意識が生まれる。地域でも色々な取り組みをしているところがあるので、学校の教員も子どもを育てるために地域が取り組んでくれることが大きな根拠になる。地域学校協働活動というのは、学校と地域の方が同じ空間、同じ場所で一緒に取り組むことではないと最近言われているが、公民館や児童館等、色々な場所で目指す子ども像を中心に、教員がいないところで活動してくれることが、教員にとっての働き方改革にもプラスになる。

地域で育てたい子ども像を共有し、そのために色々な所で色々な事が関わり、地域の子どもを育てる。この目標やビジョンを教職員も地域も共有することにより、大きく進んでいくと思う。先ほど、委員も言われたように、教職員のベクトルを合わせるためには、制度の正しい理解がまだまだ進んでいないところが現状にはあると思うが、私が経験した中で効果的であったのが、保育園、小学校、中学校の教職員と学校運営協議会の委員が一同に集まり熟議を行ったことである。普通の運営協議会を拡大したので拡大熟議になるが、熟議の中で自尊、他尊の感情に、目指す子ども像の1つであるが、「自分にはよいところがある」の項目の評価が低かったので、この評価をどうしようかと考えた時に教職員だけで行うので

はなく、保護者ができること、保育園や小・中学校ができること、それぞれができることを考えて協議を行った。その後の振り返りの感想を見ると、保育園の教職員からは、お互いが繋がることが子どもの成長に大きな影響があることがわかった。小学校の教職員は、学校だけではできないことも地域が協力することでできそうと感ずることや、中学校は、色々な人が声をかけることや認めることが大事だということがわかった。

地域の人も、地域で子どもを育てることは意義があり大事なことであるということに気付いたといった感想があった。何のために連携協働すべきか、腹を割って1つのテーマで知恵を出し合い、1つのことを作り上げる熟議こそが一番大事だと思った。1つのことを作り上げる熟議により、目標・ビジョンも備わり、何のための部分がブレずに、進めることができるのではないかと感じた。

【委員長】

熟議の一言に尽きるかもしれない。腹を割って話し合い、1つのものを一緒に作る時間や経験が関係する方々の意識を変えていく手段になるのかもしれない。

今の委員の話についての質問となるが、地域や保護者の方々だったり、他の地域の小学校や幼稚園、保育園の先生方を巻き込もうとしても、時間が合わなかったりとか、忙しかったりで熟議の場に来てくれないということがあるのではないかなと思うが、そうしたハードルをどうやって乗り越え、関係者を集めたのか。

【委員】

拡大熟議は、夏休み期間中に行った。学校運営協議会の中で、自尊他尊が課題なので、みんなで集まり熟議をしようというのは学校運営協議会の合議体として意思決定をした内容であるため、学校運営協議会の委員も、日中で仕事があっても、3ヶ月前ぐらいから決めていたので、時間を確保し出席していた。保育園や小・中学校の教職員は勤務時間中なので、小・中学では校内研修と位置付けて集まることができた。保育園に関しては、全てではないが、園長先生に取組を理解をいただいた上で集まった。年に何回もできることではないと思うが、年に1回、何かをテーマに色々な立場の人が集まり、課題を工夫をしたりするため、グループ協議を含めると、まさしく熟度と議論を通して、より納得のいく解が見い出せると考えられるし、みんなが進めようとする当事者意識が深まる。いずれは熟議に子どもを入れたいと思っている。年に1回夏休みで良いので、それぞれの市町村の教育委員会担当者の方も働きかけ、色々な所で行うことができたらと思った。

【委員】

教職員への理解、巻き込みについて今一度考えてみると、特に校長先生を中心としたビジョンは重要だと思っている。北川村で先生方と一緒に活動を行っている中で、北川村の先生達は地域との関わりの効果を実感していると感じている。どうして実感できているのかと考えた時に、生活科や総合的な学習の時間を通じて、子どもたちのやりたいことを実現するために、学校の力だけでは無理で、地域の力を借りて一緒に作り上げていくことで、先生方は実感されている。生活科や総合的な学習の時間を学校として力を入れることは、結果的に教職員に地域学校協働活動や地域学校協働本部事業の効果を理解していただけるきっかけにはなるのではないと思う。

先ほど委員や委員から、学童を中心とした学校と地域との連携の話が出ていたと思うが、特性をもった子どもに関しては、月に一度、20～30分程度情報交換の場を設けており、指導のノウハウや学校では

見えなかった良い部分を紹介し合うことで、教職員も指導に一貫性が生まれて、凄く役立つと言われていた。こういった事は、小さいことだが、すぐできるのではないかと思った。

【委員長】

北川村での取組事例を紹介していただいたが、北川村では生活科や総合的な学習の時間を、どううまくきかけで力を入れてやっていこうといった気運が生まれたのか。

【委員】

北川村の人口がどんどん減っており、子どもが将来、村に帰ってきたくするような愛着心を育むといったことを考えた事をきっかけに、令和元年度からスタートした。

【委員】

若い教職員の方々と地域の方々が接点を持つことはハードルが高いと思う。だが、先ほどの神楽の話でもあったように、地域の祭りや伝統芸能等を学校に来て、地域の方が教えてくれる。教えたものを祭りで子ども達が、地域で取組む流れを上手に活用すれば双方にメリットがあると思う。イベントや祭り等の行事に接点を置き、連携をし合いながら繋がっていくということが改めて大事だと思った。昔から行っている太刀踊りを行っている所は多いと思うが、担い手不足になってきている。元々は地区だけの子どもしか参加できない祭りだったが、全地区から募集して、参加できるようにするなど、ハードルを下げていくような取組を行っている最中ではあるが、十分ではないところもあるので、緩和していきながら、学校と地域の接点を継続的につなげていけたらと思う。また、放課後子ども教室や放課後児童クラブと学校との接点においては北川村と同じで、日高村もトリプルAといった会があり、数ヶ月に1回、学校の教職員と指導員と私とで話をしており、1学期から2学期はこのように変わったといった事を学校の教職員と共有をしている。また、学校での姿と、子ども教室等での姿に違いがあると思うが、子ども教室等での取組は共有している。学校の方からも困ったことがあったら学校に言ってきてほしいと声をかけてくれたり、子ども教室からもお願いをしている。一貫した指導ができると思うので、継続して取り組めたらと思っている。

【委員長】

伝統芸能や祭りを学校と連携し、学校で行うことは大事だと思うが、一方でアプローチする際に学校側と芸能団体や祭りの実行委員会側とがお互いに近寄りがたいといった話を聞くことはあるが、お互いの心理的な壁はどうやって取り除いているのか。

【委員】

小さい村であるため、そんなにハードルが高いわけではないが、間には必ず教育委員会が入ってお互いに橋渡しをしたり、代表者と先生をつなげたりするような役割は一定必要にはなってくる。日高村としては壁が高いという認識はないが、教育委員会が入りより丁寧に繋げていき、三者で話すことで、予算の支援を含めてお互いのできることを確認しているので、上手に回っているのではなかと思う。

【委員】

いの町でも、先ほどご紹介いただいた本川神楽や太刀踊り、伝承太鼓といった伝統芸能があるが、難

しい問題だと思っている。伝統芸能として伝承して地域に残していかなければいけないとの思いからも、学校教育活動に位置付けはしているのだが、子どもの立場になったら、総合的な学習の時間で本当にしたいのか。毎年、神楽の勉強を行い、神楽の舞をやってくれているが、子ども達が心底したいと思って活動しているのか。学校が作ったカリキュラムなので、仕方なく総合的な学習の時間で学んでいるのか、子どもの数もどんどん減っていく中で、総合的な学習の時間がマンネリ化しているというのが現状にある。伝統芸能ばかりを総合的な学習の時間で学習していくのではなく、時代の変化に合わせて、新しいものをどんどん取り入れてブラッシュアップしていかないといけないと思う。しかし、地域としては残してもらいたい。そのためには、子どもに教えてもらわないと困るという強い願いがあるので、子どもも学校も受け皿として理解して行っていてほしいが、果たして学校の教育活動としていいのだろうかといった思いはある。

【委員】

神楽が支えになっている子どもがおり、来年は、「〇〇君がやった役を僕がやる」といった意気込みや、舞ができた喜びとか、私が体験した、長沢小学校と本川中学校の子どもたちに関しては、神楽は、地域だけではなく子どもたちにとっても大事な位置付けになっていた。自分が「あの舞を踊る」、「あんな風に踊る」、「上手に踊りたい」といった目標、憧れがあり、地域の方に教えてもらうことで、居場所があり、役をもらって皆の前で舞うことができる味わうことができない体験をすることができているし、高校生になってもやりたいので地元に残る子どもや、地元を一旦出たが、戻ってきた子どももいた。

【委員】

良い取組もあれば、マンネリ化している取組もあるのではないかと思います。

【委員】

北川村は、お弓祭りという祭りがあり、千年以上続いているのだが、マンネリ化に関しては共感できる。マンネリ化している中で、どのように解決していくかといった部分で、北川村は毎年ユズを毎年扱うので、ユズのマンネリ化も起きる。例えば馬路村に行って馬路村のユズを見てみたり、他の県のユズを見てみる。自分たちの地域の外に出て似たようなものに触れることで、自分達の地域が魅力的に感じることはあるので、お祭りに関しても、周辺地域のお祭りを体験し、比べてみたりすることで、子どものマンネリ化も多少減っていくのではないかと思います。そこに、地域コーディネーターが入っていくとより先生方の負担も減ってくるのではないかと思います。

【委員長】

地域と一言で言っても、そこにある文化や歴史は多様なので、どこと繋がるか、どこと接点を持つかを自由に選ぶことができれば楽しいかもしれないが、決められていて、ずっと続けないといけないといった強制力があると、しんどくなったりマンネリ化に繋がっていくと思う。

【委員】

地域芸能や伝統については、黒潮町の佐賀地域でも子ども達の間で鼓踊りがあり、祭り自体は行っているが、コロナ禍から子ども達の踊りは止まっている。漁師の方の大漁祈願が込められてるもので、これまでは漁師の方が子どもたちを集めて、自主的にやっていたができなくなり、学校運営協議会でも必

要なのではないかといったことを話している。

その中で大事ななのは、踊りを教えるだけでは、子ども達も踊るだけになってしまうので、どういう思いや願いが込められているのか、なぜこの地域で踊られてきたのかを学ぶことが大事なのではないかなと思う。地域で生きてきた人たちの思いが見え、自分のふるさとを思う気持ちが芽生えてくるといったことが、効果としてあるのではないかと感じている。

学校運営協議会の中でも、地域の人たちとどういう子どもたちになってほしいかといった話をする中で、故郷に帰って来てもらいたいといった話はある。その中で、黒潮町佐賀は南海トラフ地震が起こったら34mの津波が来ると言われている中で、故郷に帰って来るためには、強い郷土愛が必要だといった背景がありつつ、それでも、佐賀地域で暮らし続けてきた人たちの思いに触れていくといった点では祭りには意義があると思う。ただ踊ってもらうとか、踊ってもらい助かるのかといった話ではなく、どういう思いが込められているのかを、踊りを通して学ぶといった視点が大事だと思っている。今、止まっているので、故郷を学んでいく、故郷を知っていくということを、子どもたちに伝えていきたい。

【委員長】

単に踊りを、伝えたり教えたりするだけではなくて、そこに込められた願いと、なぜこの地域で踊られてきたかという意味まで伝えることが出来たら、子どもたちもやらされてるとか、押し付けられるではなく、意味や価値を理解できる。しかし、そのためには単に学校と芸能団体を繋げれば良いといった話だけではなく、かなりハイレベルなコーディネート力を求められるし、2、3つぐらいの工夫が求められる。

【委員】

意識をコーディネーターや行う側も持つことができるかどうかは課題になってくると思う。ねらいをどこにもつのか、繋ぐことの意義を理解してもらうことが大事で形骸化しないのではないかな。

【委員】

協議タイトル、「子どもの「確かな学力、健やかな体、豊かな心」の育成に向けたコミュニティ・スクールのあり方について」のテーマに、学校が取り組むにあたり、学力や健やかな体、心の面はとても大事なことで、コミュニティ・スクール、学校運営協議会の中で、熟議をしながら進めるということは取り扱うべきテーマだと思うが、扱う際に、保護者や地域の方々に当事者意識を持っていただくことが大事である。学校運営協議会で話をしても、学校の教職員だけが取り組み、保護者や地域の方々が評価をするというのは従来のやり方である。学校運営協議会は学校運営の参画であるので、保護者、地域の方々が一緒になり、学校運営協議会で今の子ども達の学力の状況を伝え、どんな姿を目指すか、数値であったりアンケート結果であったり、色々な目標があると思うが、皆で共有し、共有したことを実現するために、学力をつけるために、学校で教職員ができること、家庭で保護者ができること、地域もできることを異なる立場の人が知恵を出し合い、確認をしたことを合議体として決定して進めることは学校運営協議会になってくる。従って、みんなで決めたことを、当事者として行い、どうやって見とるか、見とったものをどう改善をしていくかをそれぞれの学校運営協議会で3つのうちの何か1つに取組んでみると、学校運営協議会の本来の役割、学校運営の参画というのがすごく見えてくると思う。

春野地区は目指す子ども像の中で全て当事者として何ができるかを定め、定めたものに基づいてアンケート調査を行いPDCAをまわしているが、当事者意識はすごく高まってくることを実感をしている。

【委員】

教職員に対する理解ということで、人材配置に関して地域コーディネーターが担っている役割は大きいと思うが、北川村は10年ほど教員の経験を積まれた元教員の方が入っている。学校の先生を理解してる方がコーディネーターに入ると地域と学校との連携はスムーズにいく。教職員が大事にしているポイント、地域が大事にしているポイント、どっちも捉えることもあるし、特に先生の大事にしてるポイントに関しては専門性も高いので、教員経験のある方が、地域コーディネーターとして関わるができるような人材募集ができると、もっと進んでいくのではないかなと思う。

【委員長】

本日は、教職員にいかに関わり地域学校協働本部事業や地域学校協働活動の効果や、意義を理解してもらうかといったテーマで協議していただいた。

一言でまとめるには難しいほど沢山のアイデアを出していただいた。校長のリーダーシップという話から教員経験のある退職した方にコーディネーターになってもらえたらという話まで、様々な教職員に理解してもらうための方策や、大事な視点について出していただくことができた。

今日の協議については、事務局の方で、会議録としてまとめて、その内容を元に、例えば市町村回りや学校回りの際に、利用したり、その他、地域学校協働本部事業の推進に役立たせてくれたりしている。今日の協議が、この協議だけで終わらず県の施策や事業に活かされることを付言し、閉会とする。